

乳幼児期における情動調整研究の動向と展望

A Review of Studies on Emotion Regulation in Early Childhood

森野美央
Miwo MORINO

In this paper, studies on emotion regulation in early childhood are reviewed. First, definition of emotion regulation is explained. Next, studies on typical development of emotion regulation are summarized. Then, developmental processes of emotion regulation at home, at nursery school and at preschool are explored. Finally, directions for future researches on young children's emotion regulation are suggested. They are as follows: (1)exploring the teachers' role in the development of emotion regulation at nursery school and at preschool, (2)expanding previous views on the developmental process of emotion regulation by linking it to young children's emotion-related understanding, (3)including positive emotion regulation.

情動調整 (emotion regulation) は、1990年代に入ってから多くの関心が寄せられ、理論的実証的検討が進められてきたテーマである (Gross, 2008)。関心が寄せられている一つの背景として、情動調整が対人関係の構築や維持に関連する等、社会的適応に大きな影響を及ぼすものであることが示唆され、重要視されていることがあげられる (たとえば、Eisenberg et al., 2007; 中澤・竹内, 2012)。

では、社会的適応の鍵と見なされている情動調整は、生後どのように発達するのか、そして、その発達は何によって支えられているのであろうか。本論文は、情動調整に関する発達の研究を概観することにより、情動調整の発達を理解・支援する手がかりを得るとともに、今後明らかにすべき点を検討しようとするものである。

1. 情動調整とは何か

情動調整とは何かを考える前に、そもそも情動とは何かについて定義しておく必要がある。ここでは、多くの定義案に共通する要素を含む定義、すなわち、

「有機体内外の事象 (有機体の利害関心・ゴールからして重要であると評価された事象) によって、内的経験的側面、神経生理学的側面、表出的側面といった3つの反応側面が (多くの場合不可分に) 絡み合いながら発動される複雑な過程 (ただし、それは、ただ事象に導かれて生起する単なる反応ではなく、同時に有機体の生物学的あるいは社会的適応に寄与する重要な機能を果たしている) (遠藤, 1995, p.131)」を情動の定義とする。Lewis (2008) は、誕生後は各情動が未分化な状態であるが、8カ月から9カ月頃までには、原初的情動 (基本的な情動) 6種類「喜び」、「驚き」、「悲しみ」、「嫌悪」、「怒り」、「恐れ」が見られるようになるとしている。

我々の日常にも馴染み深いこうした情動を調整することを情動調整と呼ぶが、その定義となると、たとえば、どこからどこまでのプロセスを情動調整と考えるか、といった基本的な部分についてさえ目下議論中であり、情動の定義以上に多種多様な定義案が出されている状態である (Gross, 2008)。

久保 (2010) は、情動調整について統一的な見解はまだないものの、最も広く捉えているのはGross

(2008)であるとしている。Gross (2008)によると、情動調整とは、「我々がどの情動をいつ有するか、その情動をどのように経験し、表出するかを含むプロセス (Gross, 2008, p.500)」であり、そのプロセスには情動の増減や維持が含まれるという。また、情動調整というと、「悲しみ」、「怒り」、「恐れ」に代表されるネガティブ情動の調整が思い起こされやすいが、たとえば「喜び」のようなポジティブ情動の調整も含まれることが言及されている。

情動調整は、成人を対象とした研究の場合、主として自身によって調整がなされる「内在的情動調整」のプロセスに焦点があてられるが、発達研究になると、他者がかかわる「外在的情動調整」のプロセスについても焦点があてられることが多い。Gross & Thompson (2007) は、こうした発達研究の観点を含め、情動調整のプロセスモデルを示している (図1)。彼らのモデルによれば、情動調整には、情動が生じる一連の流れ (すなわち、ある「状況」への直面から、ブラックボックスである「注意」と「評価」を経て「反応」が生じ、そしてその「反応」が再び「状況」へ影響する) にかかわる5種類の調整「状況選択」、「状況変容」、「注意転換」、「認知的変化」、「反応調節」があるという。

詳しい説明はGross & Thompson (2007) に譲るが、「状況選択」とは、ある状況におかれる前に、その状況下で生じるであろう情動を予想し、身をおくか否かを選択すること、「状況変容」とは、情動が生じている状況そのものを変えること (たとえば、問題が解決せずネガティブ情動が生じている場面で問題解決を図る)、

「注意転換」とは、気晴らしをして状況への注意が向かないようにする等、内的に状況選択を行うこと、「認知的変化」とは、状況に対する見方を変えること、「反応調節」とは、情動反応を直に調整すること、である。

本論文は、情動調整の発達に関する先行研究のレビューが目的であるため、情動調整を広く捉えたGross (2008) の定義および発達の視点が含まれたGross & Thompson (2007) のモデルにかかわると判断されたものを情動調整と呼ぶ。

2. 情動調整の発達

冒頭で述べた通り、情動調整の研究は、社会的適応の観点から重要視され、検討が進められてきた経緯がある。そのため、情動調整にはどのような個人差が見られるか、個人差と外在化問題 (反社会的行動等) や内在化問題 (うつ、不安等) との関連、個人差に影響する要因に関する知見の蓄積は進んでいるが、情動調整の標準的な発達について、発達の变化を具体的に描き出す知見の蓄積はあまり進んでいないことが指摘されている (たとえば、坂上, 1999; Eisenberg et al., 2007)。

標準的な発達に関する知見は、情動調整の発達を理解・支援する手がかりとして欠かすことができない。ここでは、情動調整の発達について検討した研究を紹介し、発達の变化に関する知見をまとめることとする。

2.1 乳児期における情動調整

乳児期の情動調整には、養育者が重要な役割を果たす (Kopp, 1989)。我が子にネガティブ情動が生じた

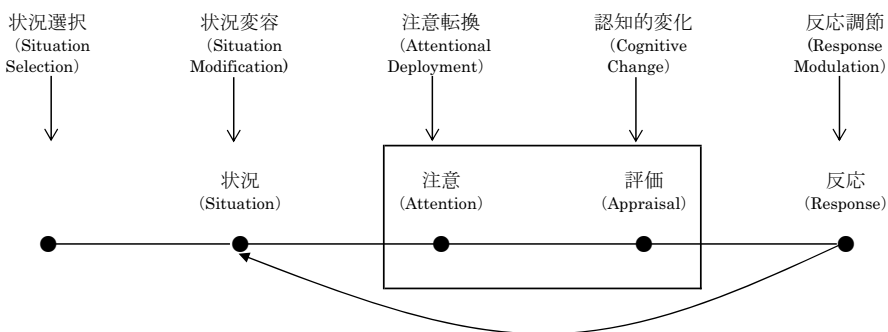


図1 情動調整のプロセスモデル
(Gross & Thompson, 2007, p.10より)

時、養育者が「状況変容」や「反応調節」を行い、情動調整をはかる光景に代表されるように、この時期は、外在的情動調整に負うところが非常に大きい。

しかし、一事が万事外在的情動調整というわけでもない。他者の情動を利用することで、自身の情動調整を行おうとする乳児の姿を報告する研究結果がある。生後10週頃、母親の喜び、悲しみ、怒りの情動表出に対して、模倣とは異なる姿、つまり各情動にあった反応をする姿（たとえば母親の喜びに対してポジティブ表情で反応する姿）が見られ（Haviland & Lelwica, 1987）、1歳頃になると、新奇な場面等、自分ではどうしたらよいか分からない状況下におかれた際、信頼できる他者の情動表出を参照し、「状況選択」を行おうとする姿も報告されている（Sorce et al., 1985）。

さらに、生後半年から1歳半頃にかけて、情動調整の内容が変化する可能性を示唆する研究がある。Mangelsdorf et al. (1995) は、6カ月、12カ月、18カ月の乳児に対して、見知らぬ大人とかかわる場面を設定し、情動調整の観察を行った。その結果、6カ月児よりも12カ月児や18カ月児で「状況変容（見知らぬ人に働きかける）」、「注意転換（他のおもちゃへ注意を向ける）」、「反応調節（指を吸ったり、服や髪をさわると自己慰撫による情動沈静化）」が多く見られること、「反応調節」は、12カ月で最も多く見られるが18カ月では減り、代わりに「状況変容」が多くなされていることが明らかにされている。

Kopp (1989) は、自己意識の芽生えや情動が生じる原因への気づきといった認知発達、情動調整に関連すると指摘している。乳児期は、主として養育者の外在的情動調整に頼りながらも、認知的側面の発達により、内在的情動調整に少しずつバリエーションが始める時期であると推測される。

2.2 幼児期以降の情動調整

幼児期前期には、ネガティブ情動を喚起させる状況の未然防止を試みる「状況選択」ができるようになっていくこと（坂上, 1996）、自律的で適応的な情動調整が少しずつ見られるようになること（金丸・無藤, 2006）が報告されている。その一方、情動調整場面において、自分の力を発揮しながら大人のかかわりを必要とする姿も報告されており（金丸・無藤, 2006）、この時期は、自身による内在的情動調整と他者による外在的情

動調整が混在する状態にあることがうかがえる。

幼児期後期から児童期初期にかけては、情動調整の必要性を理解した上での意識的な情動調整が増え、それまでによく見られる、自動化された情動調整からの質的変容が起こる可能性が示唆されている。塚本 (1997) は、5歳児、7歳児、9歳児を対象に、情動表出を調整することが求められる場面を提示し、その時に主人公はどのような表情をするかについて尋ねる研究を行った。その結果、対人場面における情動表出調整の必要性を理解するようになるのは7歳頃ではないかとしている。

児童期以降については、適応との関連を検討する研究がほとんどであったため、個人差レベルでの把握となるが、たとえば、児童期後期においても、状況によっては情動を上手く調整できず、教室場面での適応に困難が生じる可能性のある児童がいること、介入プログラムによって、情動調整に変容が見られることが報告されている（小堀・上淵, 2001；小堀・上淵, 2002）。

2.3 情動調整の標準的発達と大人の役割

2.1と2.2より、情動調整の標準的発達は次のような道筋をたどることが推測される。乳児期は、主として養育者に負う外在的情動調整が多く見られるが、その後認知的側面の発達につれて徐々に内在的情動調整が増え始め、幼児期に入ると、外在的情動調整と内在的情動調整が混在する状態を経て、次第に独力で情動を調整する内在的情動調整が多くなる。また、この時期には、量的側面の変化のみならず、主として自動化された情動調整から意識化された情動調整へと質的変容も見られる。児童期以降になると、適応の観点から外在的情動調整を必要とする者が見られる程度となる。

標準的発達を眺めると、著しい変化が見られるのは、幼児期前期から児童期初期のようである。図2に、外在的情動調整と内在的情動調整の発達イメージを示したが、この時期は、外在的情動調整から内在的情動調整へと調整の主体が切り替えられる過渡期といえよう。

久保 (2010) は、この時期について、周囲の大人は、乳児期までの「今、ここで」という外在的情動調整よりも、ゆくゆくはその場において適切にふるまえるため自分で情動調整できるようになることを目指し、適切な方向へ進むことを後押しする意図が入った外在的情動調整をするようになることと指摘する。また、こうした

視点で見ると、過渡期において、新参者(幼児)が先達(大人)とのかかわりを通して情動調整に関する学びを深めていく様は、「情動に関する徒弟制(emotional apprenticeships)」と呼べるのではないかとしている。

外在的情動調整から内在的情動調整へと移り変わる過渡期において、大人はどのような徒弟制的役割を果たしているのだろうか。過渡期の発達を促す大人の役割について、家庭における養育者のかかわり、そして、保育所や幼稚園における保育者のかかわりに分け、知見をまとめることとする。

3. 家庭におけるかかわり

金丸・無藤(2004)では、2歳児を対象とし、母子葛藤場面における情動調整が検討されている。その結果、葛藤場面で子ども側に生じるネガティブ情動が強い場合は、母親による「注意転換」や「反応調節」が積極的になされるが、ネガティブ情動があまり強くなく、子どもが主体的に「注意転換」を行おうとしている場合は、それに寄り添い、言葉や行動によって受けとめる姿が報告されている。

3歳児から6歳児を対象に、母親の情動表現スタイルと子どもの情動調整との関連について検討した研究(田中, 2009)では、ネガティブ情動の中でも、「不機嫌のように自己中心的で不快感を与える情動表現」をする母親の子どもは情動調整ができにくく、ネガティブ情動が生じやすいが、「感謝する等の肯定的情動や

謝る、悲しみを示すといった、他者に共感した上で生じる親和的で共感的な情動表現」をする母親の子どもは情動調整に長けている可能性が示されている。この結果について、田中(2009)は、自己中心的で不快感を与える情動表現をする母親は、他者の情動よりも自身の情動の方に注意が向けられている可能性があり、子どもの情動を理解し、受けとめ、調整するという行為をしていないのではないかと指摘する。

親が自身の情動とどのように向き合っているか、また、子どもが抱く情動へどのようにかかわっているか、については、数年後の子どもの発達にも関連することが報告されている。Hooven et al. (1995)は、5歳時と8歳時の縦断的研究によって、両親自身が抱くネガティブ情動へのかかわりと子どもが抱くネガティブ情動へのかかわりが、3年後の子どもの発達にどのような影響を及ぼすかを検討した。その結果、親が自身のネガティブ情動を認識するとともに、子どもが様々な情動を経験することを受容したり、それぞれの情動へどのように対処するかを考えたりしている親の子どもは、そうでない親の子どもに比べ、8歳時の学力や身体的健康度が良好で、問題行動も少ないことが示されている。

これらの研究から、幼児期の親は、子どもが主体的に情動調整をしている場面を見守りつつ、必要に応じてサポートをしたり、情動調整の方法について言葉を介して伝えたりしながら、子どもの情動調整の発達、さらにはその後の心身発達を支える役割を担っている

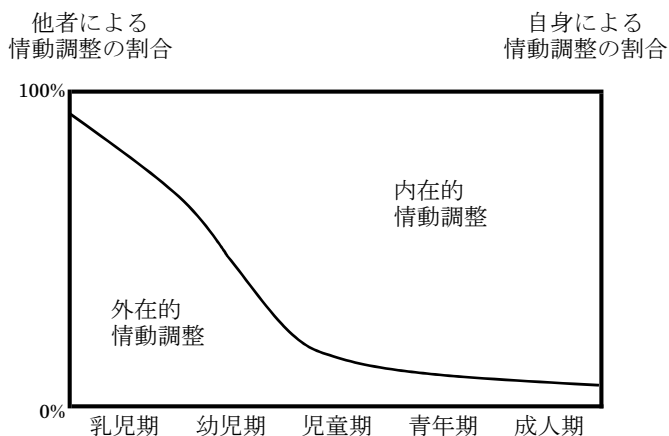


図2 外在的・内在的情動調整の発達イメージ

と推測される。また、親自身が情動調整する後ろ姿を見て子どもが学ぶ、モデルとしての役割も担っているようである。

児童期に入ると、子ども側が、自分と親の関係性に応じ、いかに情動表出するかを意図的に調整する姿が見られるようになる。Zeman & Garber (1996)は、児童(1, 3, 5年生)を対象として、彼らが悲しみや怒りを、他者(父, 母, 友達)との関係性に応じてどのように表出しているかを検討した。その結果、児童は、母親に比べて友達には悲しみを表出せず、母親は友達よりも悲しみの情動表出を受容してくれると考えていることや、年齢があがるにつれて父親の前で悲しみや怒りを表出せず、父親は母親や友達と比べて情動表出を受容しないと考えていることが報告されている。埜(1999)は、児童(2年生から5年生)を対象として、喜び、悲しみ、怒りの表出を取り上げ、他者との関係性の質(父, 母, 友達との肯定的関係性)も加え、さらなる検討を行った。その結果、喜び表出は、低学年(2, 3年生)で肯定的関係の相手に多くなされており、高学年(4, 5年生)ではその関連がさらに強くなっていること、悲しみ表出は高学年で肯定的関係の父親や母親に対して多くなされ、怒り表出は低学年で肯定的関係の相手になされないとという傾向が示された。

児童期の親は、幼児期のように積極的に徒弟制的役割を担う存在というよりも、子どもが必要とする時のみ役割を担う存在となっている可能性がある。

4. 保育所・幼稚園におけるかかわり

情動調整の発達に親が果たす役割を検討した研究に比べると、保育者が果たす役割を検討した研究は非常に少ないことが指摘されている(Ahn, 2005)。Ahn(2005)は、研究数が伸び悩む背景に、保育所や幼稚園に長時間子どもが預けられ、保育者と過ごすことを良しとしない風潮があるためではないかとしている。しかし、少なくとも日本においては、既に3歳の時点で約8割の子どもが保育所や幼稚園等何らかの保育施設へ通っており(厚生労働省, 2009)、そこで出会う大人が保育者であることを考えると、彼らが情動調整の発達にかかわる何らかの徒弟制的役割を担っている可能性は否めない。

森田(2004)は、情動調整と仲間関係に関する研究

を概観するにあたり、保育場面における情動調整の発達を直接扱った実証的研究がないため、代わりに葛藤解決方略の発達の変化を検討した研究を用いて概観している。この中に、間接的ではあるものの、情動調整の発達に保育者が果たす役割が示唆されている。保育者は、親と同じように、幼児の発達に応じてかかわり方を変えており、たとえば、幼児期前期には自らが積極的に情動調整へかかわる必要性を感じた時にはかかわるが、徐々に幼児が主体的に情動調整を行うことができるよう、情動調整の方法について言葉を介して伝えながら情動調整の発達を支えていると推測されるのである。

Ashiabi(2000)は、養育者(caregiver)による情動調整の発達を支えるかかわり方が、保育者にも適用できるのではないかと指摘し、「モデリング」、「コーチング」、「随伴反応(contingent responding)」の3種類を紹介している。「モデリング」とは、養育者が自身の情動を調整している姿を子どもが見て学ぶことを指し、「コーチング」とは、養育者が言葉を介して情動調整に関する知識を伝えたり、子どもの情動について話し合ったりすることを指す。そして、「随伴反応」とは、養育者が実際に子どもの情動反応へかかわる場面を通して子どもが学ぶことである。

Ashiabi(2000)の視点で、幼児と保育者のかかわりが描かれている事例を見ると、「情動調整の研究」と銘打ってはいないものの、「コーチング」や「随伴反応」が含まれていることが分かる。ここでは、友定ほか(2009)から一つの事例を紹介しよう。

「5歳児：トランプからたたき合いに」

あきお・だいすけ・そうやの3人が激しくたたき合っている場面に出会う。あきおは大声で泣いている。だいすけとそうやは、泣いているあきおにさらにかかってくる。私(保育者)は見かねて間に入って、たたき合いを止める。私の力を押しつけて、再びだいすけ・そうやはあきおにかかっている。通りかかった養護教諭があきおを受け止め、私は「それ以上やっちゃいけん」とだいすけとそうやを抱き寄せる。

私が「わけを聞こう」というと、あきおが「ほくだけ負けさせる」とくやし涙をぼろぼろ流しながら訴えるように言う。そうやが「あきくんは、トランプ負けただけで、いきなりたたいてきたんじゃから」

と怒って言う。横からだいですけが泣きながら「ぼくもたたかれた」と言う。見ると、だいですけの首が赤くみずばれになっている。

私は「トランプだから勝ったり負けたりするんだけどな、くやしかったの」とあきおの方を向いて言う。「僕はいつも負けるんだ」と言うあきおに、私は、「そうか、つまんなかったん。でもね、やっているうちにいつかは勝つこともあるんよ。腹立てて友達にやつあたりしたらいけんわね」と諭す。だいですけが「トランプは、勝ったり負けたり、勝ったり負けたりするのに」とボソボソ言いだす。私「そうだよ。あきくん、ずっとずっと負けが続いて嫌になったんだってさ。でもね、こんなひどいたき合いになったら、トランプゲームも楽しくなくなるよね。そして痛いでしょう。負けても、それはもうこらえられるようになって欲しいな、年長さんだよ」そう言っていたら落ち着いてきたのか、あきおから「だいくんごめんね、そうくんごめんね」と言う。そうや「いいよ」だいですけ「ごめんね」。養護教諭がだいですけの首の手当てをしてくれる。私、「良かった。仲直りできて。ところでどんなゲームなの、先生にも教えて」と頼む。だいですけがトランプゲームのやり方を説明してくれる。

この事例には、情動調整ができずたたき合いにまで発展してしまった場面で、保育者がまさに「随伴反応」をし、その中で「コーチング」がなされている様子が捉えられている。保育者は、まずだいですけ達を抱き寄せ、彼らに生じているネガティブ情動への「反応調節」をしながら、反応が落ち着いてきた頃を見計らい、ネガティブ情動とのつき合い方や表出の仕方について「コーチング」をしている。幼児は、こうしたかかわりを通して、1.で紹介した「情動調整のプロセスモデル」に関する学びを深め、外在的情動調整から内在的情動調整へと主体的に情動調整を行う方へ進むための足がかりを得ている可能性がある。

幼児を対象としたストレス研究では、園生活の中で友人関係が最もネガティブ情動を感じやすい場面であり、ネガティブ情動が生じた際、幼児が保育者を頼りに情動調整をしようとしていること(嘉数ほか,1994)、3歳児や4歳児では保育者による外在的情動調整を必要とする場面が多いが、5歳児になると、自ら「状況

変容」、「注意転換」、「認知的変化」、「反応調節」を行うようになること(小林,2003)が報告されている。

こうした発達の変化に対し、保育者が重要な役割を果たしている可能性は高いと考えられる。現段階では、主として推測の域を出ない知見の紹介しかできなかったが、保育場面を捉えた実証的研究によって、保育者の徒弟制的役割が明らかにされ、知見の積み上げが期待できると考える。

5. 今後の課題

本論文では、情動調整に関する発達の研究について、「情動調整の発達」、「家庭におけるかかわり」、「保育所・幼稚園におけるかかわり」という3つの観点から知見整理をした。その結果、情動調整が外在的情動調整から内在的情動調整へと移り変わる過渡期において、大人が担う徒弟制的役割の重要性が浮き彫りにされた。ここでは、過渡期における情動調整の発達を理解・支援するために、今後明らかにすべき点について考えることとする。

5.1 保育者による情動調整

4.で述べた通り、過渡期の発達には、親だけでなく、保育者も重要な役割を果たしていることが推測される。保育者の情動を捉えた研究では、自らの情動を意図的に表出したり(中坪ほか,2011)、絵本に出てくる主人公の情動を真似て見せたりし(Ahn,2005)、明確な意図を持って保育を展開しようとする保育者の姿がうかがえる。さらに、大野ほか(2010)では、幼児が様々な情動を経験し、内在的情動調整を行えるようにと、非日常的な体験を意図的に計画する保育者の姿が描かれている。

このように、保育の場では、幼児の発達にふさわしい生活が展開されるように、幼児の発達の実情や内面の動き等を的確に把握し、計画が立てられ、意図的援助・配慮が必要とされ、行われている。保育者は、日々の保育の中で徒弟制的役割を意識的に担い、幼児が情動調整プロセスモデルの「状況選択」から「反応調節」にかかわる学びを深められるようなかかわりをしている可能性が考えられるのである。保育者による情動調整を捉えることにより、過渡期における情動調整の発達を理解・支援する手がかりがつかめるのでは

ないだろうか。

また、保育者は、情動調整の発達に関連して、子育て支援の観点からも重要な役割を担っている可能性がある。森田(2004)は、家庭における母親とのかかわりが上手いかず、子どもが情動調整の難しさを抱えた場合、保育者がその子どもに対し、丁寧かつ適切にかかわることで、情動調整の発達を少しずつ促しているのではないかと指摘する。たとえば、先に紹介した友定ほか(2009)のように、仲間とのかかわりで情動調整が上手い場合、保育者のかかわりによって徐々に内在的情動調整ができるようになった子どもが、保育者にかかわってもらった経験を家庭に持ち帰ることで、母親との関係がプラスに転じる可能性があるのではないかと考えられているのである。ちょうど先日の新聞に、5歳児の母親による次のような投稿が掲載されていた。

「天使吸い込めば幸せ」

一人息子は年長さんです。共働きなので1歳から保育園でお世話になっています。先生から教えてもらったことを、いろいろと家で教えてくれます。

ある日のこと。「ママ、腹が立ったら鼻から息を大きく吸って、口からはくと落ち着くねん」。今はやりのロングプレス？ 深呼吸のことかなと、うなずきながら聞いていた。「そしたら鼻から天使がいっぱい入ってきてな、胸にいた悪魔が逃げていくねん。今日、腹立つことがあってさ……。悪魔がおったけど、ゆっくり息吸って、ゆっくりはいてん。落ち着いたわ～。胸に天使いっぱいやで」

子どもにわかりやすくすてきな話をしてくれた先生に感謝です。また、その話を私に伝えてくれる息子もすてきだと思いました。

年齢を重ねると友達関係も複雑になり、悩むこともあります。そんな中で、自分の気持ちをコントロールできるなんて。ずいぶんしっかりしてきたな、と感心しました。これからも嫌なこと、腹が立つこと、いろいろあると思うけど、大きく息を吸ってはいて、胸を天使でいっぱいにして乗り越えていけるといいなあ。(朝日新聞 2012.10.24. 朝刊第13版「ひととき」より)

「反応調節」を分かりやすい言葉で伝え、5歳児の内在的情動調整を促そうとする保育者の意図と、森田(2004)が指摘するように、保育者のかかわりによ

て、母親との関係がプラスへ傾く様子がうかがえる。保育者が幼児の発達状態に応じて、どのようにかかわり、どのようなかかわりが情動調整の発達や家庭でのかかわりを促すことになるのか、子育て支援の観点からも、保育者が果たす役割を実証的に検討する研究が必要である。

5.2 情動にかかわる理解との関連

情動調整の発達には、情動にかかわる理解の発達が密接に関連している(Eisenberg et al., 2007)。たとえば、情動のラベリング、情動について語る力、情動が生じる原因への理解、情動表出の必要性や情動表出が他者へ及ぼす影響の理解といった、情動にかかわる様々な理解が情動調整の発達に影響すると考えられている。

坂上(2000)は、5歳児を対象に、情動表出の影響についてインタビューを行っている。理解の程度は、情動の種類で異なっており、たとえば、自分が悲しみを表出した場合、友達は、悲しい、かわいそうといった共感的な情動を抱き、謝ったり慰めたりと肯定的反応を多くするが、怒りを表出した場合は、ネガティブ情動を抱き、謝ったり話を聞いたりする以外に、泣いたり怒ったりと否定的反応も示されると考えていることが明らかにされている。また、友達への情動表出の影響に関する質問に対し、「分からない」と回答した幼児が3割から5割程度おり、少なくともその中の8割以上は、友達の前で悲しみや怒りを表出しないと回答していたという。情動の機能に気づき始めた幼児がいる一方で、そもそも情動自体へ意識が向きにくい幼児がいる可能性が考えられる。このように、情動にかかわる理解の程度によって、情動調整の発達に個人差が生じ、保育者もかかわり方を変えている可能性がある。

情動調整の個人差については、情動を調整しすぎる「調整過剰タイプ」、生の情動がそのまま行動に出てしまう「調整不足タイプ」、程良い調整ができる「適度な調整タイプ」の3種類が知られている(Eisenberg et al., 2007)。保育現場では、各年齢に相応の集団的かかわりに加え、それぞれのタイプに適した個人的かかわりがなされ、情動調整の発達が促されていると推測されるが、なぜ保育者がそのようなかかわりをしたのかを考える際、情動に関する理解との関連も含めることで、情動調整の発達における保育者の意図や役割がより詳しく把握できるだろう。

5.3 ポジティブ情動の調整

1. で、情動調整はポジティブ情動の調整も含む概念であることを紹介したが、情動調整をテーマにした研究では、ネガティブ情動の調整に焦点をあてた検討がほとんどであった。これは、情動調整の研究が社会的適応の観点で進められてきた背景に依るものであろう。

しかし、幼児にとっては、情動調整が将来的な適応を目指すもののみではなく、「今ここ」を豊かにするものとしても重要であると考えられる。保育所保育指針の「保育の目標」部分には、「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う」と明記されている。すなわち、保育の場では、子どもの「未来」を見据え、長期的視野を持つかわりと、子どもが「現在」心地よく生き生きと幸せであるためのかわり、この両方が必要とされているのである。

現在筆者は、5.1と5.2で述べた課題に加え、森野(2010)で言及した課題および当論文へのコメント(氏家, 2010)から生じた問題意識に立ち、保育の場における情動調整をOn timeで捉える研究を進めている。研究を進めるうちに、保育者による情動調整は、ネガティブ情動の調整ばかりではなく、図3のように様々な情動調整がなされていることが分かってきた。(1)や(2)は、お集まりでトラブルが起こり誰かが泣く等、集団内にネガティブな雰囲気か漂ったときのかかわり、(3)は楽しさや嬉しさを増幅させるかわり、(4)は最後のまとめに入る場合等に活性化された情動を落ち着ける際のかかわり、といった具合に、これまでの研究であまり扱われてこなかったポジティブ情動の増減に

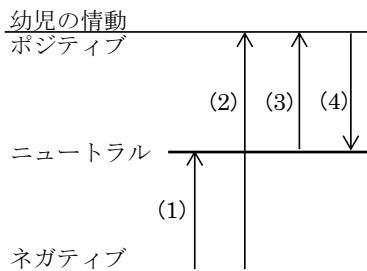


図3 保育者による情動調整

かかわる調整(3)と(4)も多くなされているのである。ポジティブ情動の調整に着目することによって、これまであまり焦点があてられてこなかった、「今ここ」をより豊かにする情動調整という、新たな視点が提供できるのではないかと考える。

引用文献

- Ahn, H. J. 2005 Teachers' discussions of emotion in child care centers. *Early Childhood Education Journal*, **32**, 237-242.
- Ashiabi, G. S. 2000 Promoting the emotional development of preschoolers. *Early Childhood Education Journal*, **28**, 79-84.
- Eisenberg, N., Hofer, C., & Vaughan, J. 2007 Effortful control and its socio emotional consequences. In J.J. Gross (Ed.), *Handbook of Emotion Regulation*. New York: Guilford Press. pp. 287-306.
- 遠藤利彦 1995 乳幼児期における情動の発達とは たらき 麻生 武・内田伸子(編) 講座 生涯発達心理学2 人生への旅立ち: 胎児・乳児・幼児前期 東京: 金子書房 pp.129-162.
- Gross, J.J. 2008 Emotion regulation. In M. Lewis, J. M. Haviland-Jones, & L. F. Barrett (Eds.), *Handbook of Emotions* (3rd ed.). New York: Guilford Press. pp. 497-512.
- Gross, J.J., & Thompson, R.A. 2007 Emotion regulation: Conceptual foundations. In J.J. Gross (Ed.), *Handbook of Emotion Regulation*. New York: Guilford Press. pp. 3-24.
- 塙 朋子 1999 関係性に応じた情動表出: 児童期における発達の变化 *教育心理学研究*, **47**, 273-282.
- Haviland, J. M., & Lelwica, M. 1987 The induced affect response: 10-week-old infants' responses to three emotion expressions. *Developmental Psychology*, **23**, 97-104.
- Hooven, C., Gottman, J. M., & Katz, L. F. 1995 Parental meta-emotion structure predicts family and child outcomes. *Cognition and Emotion*, **9**, 229-264.
- 嘉数朝子・井上 厚・白石敏行 1994 幼稚園におけ

- る幼児の心理的ストレスおよび対処行動 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部, **45**, 15-29.
- 金丸智美・無藤 隆 2004 母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差 発達心理学研究, **15**, 183-194.
- 金丸智美・無藤 隆 2006 情動調整プロセスの個人差に関する2歳から3歳への発達の変化 発達心理学研究, **17**, 219-229.
- 小林 真 2003 幼稚園生活における幼児のストレス対処行動: 保育者の評定に基づく実態調査 富山大学教育学部紀要, **57**, 167-174.
- 小堀友子・上淵 寿 2001 情動のモニタリング操作が学習に及ぼす影響 教育心理学研究, **49**, 359-370.
- 小堀友子・上淵 寿 2002 教室場面での児童の情動制御: メタ・エモーション・インタビューを用いて 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 265.
- Kopp, C. 1989 Regulation of distress and negative emotions: A developmental view. *Developmental Psychology*, **25**, 343-354.
- 厚生労働省 2009 就学前児童が育つ場所 <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/06/dl/s0608-11c_0069.pdf> (2012年10月31日)
- 久保ゆかり 2010 幼児期における情動調整の発達: 変化, 個人差, および発達の現場を捉える 心理学評論, **53**, 6-19.
- Lewis, M. 2008 The emergence of human emotions. In M. Lewis, J. M. Haviland-Jones, & L. F. Barrett (Eds.), *Handbook of Emotions* (3rd ed.). New York: Guilford Press. Pp. 304-319.
- Mangelsdorf, S. C., Shapiro, J. R., & Marzolf, D. 1995 Developmental and temperamental differences in emotion regulation in infancy. *Child Development*, **66**, 1817-1828.
- 森野美央 2010 幼児期における感情理解 心理学評論, **53**, 20-32.
- 森田祥子 2004 乳幼児期の情動調整の発達に関する研究の概観と展望: 保育の場を視野に入れた情動調整の発達を理解を目指して 東京大学大学院教育学研究科紀要, **44**, 181-189.
- 中坪史典・金子嘉秀・中西さやか・富田雅子 2011 保育者のストラテジーとしての感情労働: 幼稚園3歳児クラスの分析から 幼年教育研究年報, **33**, 5-13.
- 中澤 潤・竹内由布子 2012 幼児におけるネガティブ情動の表出制御と仲間関係 千葉大学教育学部研究紀要, **60**, 109-114.
- 大野 歩・真鍋 健・岡花祈一郎・七木田敦 2010 幼稚園における非日常的な体験とその意味について: 幼児たちはどのようにゴーリーと出会うか 保育学研究, **48**, 47-57.
- 坂上裕子 1996 生後三年目における情動制御の発達 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 194.
- 坂上裕子 1999 歩行開始期における情動制御: 問題解決場面における対処行動の発達 発達心理学研究, **10**, 99-109.
- 坂上裕子 2000 情動表出に関する幼児の認識 日本発達心理学会第11回大会発表論文集, 348.
- Sorce, J. F., Emde, R. N., Campos, J., & Klinnert, M. D. 1985 Maternal emotional signaling: Its effect on the visual cliff behavior of 1-year-olds. *Developmental Psychology*, **21**, 195-200.
- 田中あかり 2009 母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響 発達心理学研究, **20**, 362-372.
- 友定啓子・入江礼子・白石敏行・小原敏郎 2009 子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか: 500枚の保育記録から コロニー印刷
- 塚本伸一 1997 子どもの自己感情とその自己統制の認知に関する発達の研究 心理学研究, **68**, 111-119.
- 氏家達夫 2010 発達研究が捉える感情は生ぬるくなってしまったのか?: 久保氏, 森野氏, 坂上氏の論文に対するコメント 心理学評論, **53**, 56-61.
- Zeman, J., & Garber, J. 1996 Display rules for anger, sadness, and pain: It depends on who is watching. *Child Development*, **67**, 957-973.

謝辞

本研究は、JSPS科研費24730555の助成を受けたものである。研究実施に際して多くの示唆を与えてくださったH幼稚園の先生方、園児の皆様、ご関係の皆様へ深く感謝し、この場をお借りしてお礼申し上げます。

〈日本語キーワード〉

情動調整, 乳幼児, 情動にかかわる理解, 保育者の役割, ポジティブ情動の調整

〈キーワード〉

Emotion regulation, Young children, Emotion-related understanding, Role of teachers at nursery school and at preschool, Positive emotion regulation

森野 美央 (子ども発達教育学科)

(2012.11.15 受理)